

No.42

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2006.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 古場 勝憲

〒844-8585 佐賀県唐津市蒲原町田代3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/ai-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



いろえはなからくさもんふたもの 色絵花唐草文蓋物

館蔵資料

肥前・亀山焼 19世紀前半

口 径 : 20.0cm

高 さ : 11.0cm

高台径 : 12.0cm

亀山焼は幕府の天領であった肥前国長崎村伊良林郷（現在は長崎市伊良林）で焼成された陶磁器で、古文書によれば、窯は文化4（1807）年にオランダ船向けの水甕を焼成する目的で、長崎奉行所の後援を受けて開窯されたとあります。文化11（1814）年からは天草陶石と中国の最高級呉須を使用しての磁器生産を開始し全国的に有名になりますが、物価高騰などにより慶応元（1865）年に廃窯となりました。製品は染付磁器を中心で、わずかに色絵磁器も焼成しています。

本資料は、亀山焼には珍しい色絵の蓋物で、蓋・身の外面全体に赤・緑・黒・金の色絵で花唐草文が描かれ、金彩も施されています。蓋と身の内面にも貝・海草文が染付と色絵により描かれています。また、高台内には「亀山製」の染付銘があります。

平成18年度 展覧会のお知らせ

特別企画展 「將軍家への献上 鍋島—日本磁器の最高峰—」

○趣旨

従来の鍋島展では、陶工及び鍋島藩側の事情にもとづく変遷が紹介されてきましたが、本展覧会では、鍋島焼は将軍家献上を主目的としたため、幕藩体制の絶対権力者徳川将軍家の動きに敏感に反応して変遷を遂げたという新たな視点で藩窯の歴史をたどります。

3代将軍家光への献上磁器として1650年代初めに有田で鍋島焼が生まれ、次いで伊万里市大川内山へ藩窯が移転して「初期鍋島」が作られました。5代将軍綱吉の元禄時代に隆盛期を迎える、8代将軍吉宗以降の成熟期を経て、10代将軍家治の田沼時代に「家治好み」の新鍋島様式が完成します。こうした将軍家の動きに対応した鍋島焼の変遷を紹介します。

○主催及び会場

佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2・第3展示室

○会期 平成18年9月30日(土)～11月12日(日)

44日間(休館日なし)

○観覧料 大人 620円(510円)

大学生 300円(200円)

※()は20名以上の団体

高校生以下及び障害者の方は無料

○出品点数 陶磁器 240点(予定)

○展示内容

第1章 草創期～家光と鍋島焼の草創

第2章 成長期～藩窯の移転と生産体制の確立

第3章 隆盛期～綱吉と元禄・鍋島様式の完成

第4章 成熟期～吉宗と鍋島焼の成熟

第5章 衰退期～「家治好み」の新鍋島様式

○印刷物 展示品を掲載した図録を刊行します。



色絵唐花文変形皿 1650年代



染付鶴文三脚付皿（重要文化財） 1690～1710年代



色絵桜樹文皿 1700～1720年代



色絵鶴鴿文皿 1700～1720年代

「新収蔵品展」

- 会期 平成18年6月2日(金)～6月22日(木)
- 内容 平成17年度に購入・寄贈により新たに収蔵した資料を紹介します。今回は、初期色絵の名品である色絵菊文輪花大皿や柿右衛門様式の色絵花鳥文鉢、初期の唐津焼である鉄絵草文向付(5点セット)などの購入資料の他、柿右衛門様式の色絵唐人船遊図皿などの寄贈資料です。
- 展示数 64件 79点(予定)
- 会場 第1展示室



色絵菊文輪花大皿 有田 1650年代

テーマ展

「親子で楽しむ学芸員体験展」

- 会期 平成18年7月25日(火)～7月30日(日)
- 内容 親子でやきものを選んで解説を加え展示するまでを1日で体験します。体験展示した資料は親子学芸員体験展として、一般の来館者にも観覧していただきます。また会期中に、参加者による展示解説会も開催します。
- 展示数 50件 70点(予定)
- 会場 第1展示室



当館学芸員の説明を受ける親子学芸員(平成17年度)

テーマ展

新春展「福をよぶやきもの」

- 会期 平成18年12月22日(金)～
平成18年1月14日(日)
- 内容 新春にちなみ、肥前や九州の陶磁器のなかから福をよぶ文様(吉祥文様)があらわされた皿や鉢などを選び展示します。
- 展示数 50件 70点(予定)
- 会場 第1展示室

染付大根鼠文輪花皿 有田 1810～40年代(柴田夫妻コレクション)
大根と鼠・打ち出の小槌・金の鍵で大黒様をあらわしています。

テーマ展(古伊万里の見方シリーズ3) 「有田磁器の装飾技法」展

- 会期 平成19年2月7日(水)～2月25日(日)
- 内容 柴田夫妻コレクション等を活用して刊行する冊子『古伊万里の見方シリーズ3』で紹介した内容をもとに、線彫り、印刻、吹墨、型紙摺りなど有田磁器に見られる様々な装飾技法を体系的にわかりやすく紹介します。
- 展示数 60点(予定)
- 会場 第1展示室

染付竹虎文変形皿 有田 1700～30年代(柴田夫妻コレクション)
型紙摺りによる絵付けがなされています。

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて2 英国の肥前磁器コレクション

オランダのOrange 公Williamに嫁いだ英國の王女 Maryが夫と共に王位につくため1688年に英國に戻り、その際にオランダから持ち帰った日本からの輸出肥前磁器で王宮を飾ったのに倣った貴族たちの屋敷には、今も中国陶磁に混じって肥前磁器が飾られているのが見られる。その飾り方は大陸のように、蓋付壺3、筒形広口瓶2の五つ組をセットで並べるのではなく、筒形広口瓶1対、蓋付壺1対として暖炉の両脇、或はサイドテーブルの上に、残りの蓋付壺1箇は暖炉の前や小テーブルの上や下にと、時には別の部屋に分散して飾られ、文様からそれがもともと五つ組1セットとわかる場合もある。ペアごとに文様が異なる場合は、本来の五つ組が分けられて、例えば筒形広口瓶だけが娘の嫁ぎ先に、蓋付壺は実家という例もあるのではと、家と家の婚姻関係を考えながら蔵品を見ることも必要と近年考えている。破損したものは地下の収蔵庫に置かれ、残ったものを1対として活用したり、当主好みやその時の室内装飾に合わぬものがしまい込まれたまま、時には数代、放置されることもあり、収蔵庫の調査も必要である。家の維持費捻出のための売却、あるいは寄贈により、博物館、美術館に入ったものも多く、日本のバブルの時期にオークションの高値を見て収蔵庫から引き出され、日本に里帰りしたものも多いが、それでもまだ、変わらず持ち続けている家もあり、英國の研究者と日本の研究者との協力による一日も早い調査が待たれる。英國でまとまつた肥前磁器を見るには、そのようなわけで、museum(美術館)、royal palace(王宮)、country house(貴族の館)の3グループのそれぞれを廻ることが必要である。

1. Museums (美術館)

英國で肥前磁器を収蔵するmuseumの代表的なものはロンドンのBritish Museum (略してBM) とVictoria & Albert Museum (略してV&A)、オックスフォードのAshmolean Museum (アシュモリアン・ミュージアム)、ケンブリッジのFitzwilliam Museum (フィッツウィリアム・ミュージアム) である。BMには日本陶磁常設展示室がないため、古くからの膨大なコレクションと、近年柴田夫妻から寄贈されたコレクションは、日本美術室で行われる展覧会に関連した数点が展示されることがある以外は倉庫に眠っている。V&Aでは代表的なものが1986年開設の1階のToshiba Galleryと4階の陶磁室に陳列され、残りは館の収蔵庫や、Olympiaの倉庫にある。Ashmolean MuseumはReitlinger (ライトリッガー) 寄贈の柿右衛門様式を中心多く優れた肥前磁器を有し、1階のショーケースに代表的なものが陳列されているが、多くは2階の収蔵庫に納められている。Fitzwilliam Museumの陶磁室にはSoame Jenyns (ソーム・ジェニンズ) の家族から寄託された多数の染付、色絵が陳列されている。

たなかしげこ
田中恵子

- 日本アジア協会理事
- 東洋陶磁学会（日本）会員
- The Oriental Ceramic Society(London)会員

2. Royal Palaces (王宮)

Buckingham Palace (バッキンガム・パレス)、Kensington Palace (ケンジントン・パレス)、Hampton Court Palace (ハンプトン・コート・パレス)、Windsor Castle (ウィンザー・カースル) などに、早い時期に輸出された肥前磁器が飾られているのが見られる。

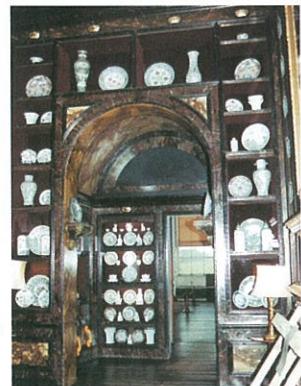
3. Country Houses (貴族の館)

今回はまずBelton House (ベルトン・ハウス) を紹介する。(ロンドンから電車で1時間強のLincolnshire (リンカンシャー) のGrantham (グランサム) 駅下車。開館日などはホームページ参照)

ロンドンから北上する古くからの街道A1沿いの町 Stamford (スタムフッド) に隣接するBurghley House (バーリー・ハウス) にある東洋陶磁コレクションは、館に残る1688年、1690年の二種の蔵品目録と照合することで1982年以降、編年が進み、初期の色絵、染付、柿右衛門様式の種々の置物など、日本へも1987年の展覧会で紹介され、知られるようになったが、A1をさらに30キロほど北上したGranthamに1685年から88年の間に建てられたオランダの建築様式の影響が色濃いBelton Houseにも多くの清朝の中國陶磁に混じって、肥前磁器が多種、収蔵されていることはあまり知られていない。

Burghley Houseは1587年に時のエリザベス女王の蔵相であったWilliam Cecil (ウィリアム・セシル) によって建てられ、今もその子孫のLady Victoria Leatham (レイディ・ヴィクトリア・リーサム) が家と資産を管理する財団の長として大きな館の一部に家族と居住するが、100年近く建てられたBelton Houseでは嫡男が生まれずに一族の男子の間で何度か家督が移動し、家を公開して家の維持を計ろうとした第7代 Brownlow (ブラウンロー) 男爵に至ってとうとう1983年に領地もろとも家を売りに出さざるを得なくなったが、1984年に自分と家族のための住居部分を除く家、庭とその中の彫像、家財の一部をNational Trust (ナショナル・トラスト) に寄付、National Trustはこの屋敷の領地や残る家財を買い取り、維持基金を設立するのに各方面から寄付を仰ぐことによって、肖像画、陶磁器、銀器、図書、家具など主要なものは全て家と共にNational Trustが保存、公開している。

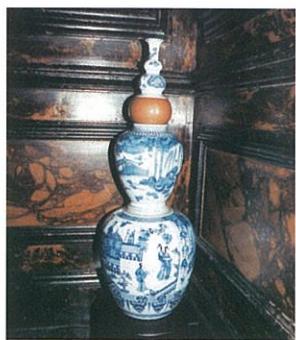
Belton Houseに残る1698年の蔵品目録は陶磁器についてはあまりにも記述が少ないとのことであるが、1770年までの9年間下院議長をつとめたSir John Custが当主の時、その弟のPeregrineが1767年から69年まで



Belton HouseのThe Ante Library

英國東インド会社の役員であったので、陶磁器の一部はそちらからの購入とも考えられるが、現存する陶磁器の多くは20世紀に入ってからの家督の移動で、現当主の祖父第五代男爵の出た家であるロンドンに南下する途中のCockayne Hatleyから来たともといわれている。この館ではいたる所に東洋陶磁が飾られ、特に客用寝室の控えの間を書庫にした小部屋（The Anti Library）では、染付の壺を重ねて丈の高い瓢形壺にしたもののが置物として床におかれ、天井まで壁一面に作られた本棚やキャビネットの中には、清朝の染付でこの家の紋章入りのディナーセットや色絵のディナーセットに混じって、柿右衛門様式

色絵松鶴梅鳥文角瓶4本、大中小の丸皿、扇形小皿、長頸壺など多数が飾られている。



The Anti Libraryの瓢形壺
中央部は肥前染付壺



The Anti Libraryの
飾棚内の肥前と中国の色絵
上段の肥前の皿D.32cm



The Anti Libraryの飾棚内の肥前と中国の色絵、中国の白磁
上段中央肥前菊型皿D.33cm



The Anti Libraryの壁の棚の松鶴梅鳥文角瓶一対
H.25.5cm, D.10.5cm

次にスコットランドのある館のコレクション（保安上匿名）を紹介する。1066年にWilliam征服王と共にフランスから渡ってきた古い家柄のこの家は、まずイングランド北部に落ち着き、婚姻により1250年にさらにスコットランド南部の土地財産を手に入れて勢力を伸ばし、その後も結婚で資産と地位を高め、第2代

伯爵はスコットランド担当大臣にまで上り詰めるが、王や他の貴族の不興を買い、地位と年金を奪われて1682年嗣子なく死に、爵位は弟に行く。その後も7回、爵位は一族の男子の間で移動し、現在は館と別のところにある。館の幾度かの改装後、東洋陶磁は中国室と呼ばれる小部屋に陳列されている。

筆者はこの館をはじめて訪れた1992年8月、染付や色絵の蓋付壺の並ぶ部屋の中に「色絵亀乗人物置物」を見つけたが、館にある鑑定書では19世紀九谷のコピー、150ポンドとなっていた。帰途Burghley Houseの「色絵亀乗人物置物」を見直し、1990年にドイツのKassel（カッセル）で見た同種のと加え、スコットランドの「色絵亀乗人物置物」が同じ型で作られたものであることを確認した。翌93年4月には有田で88年に赤絵町で発見された亀の甲の土型とこの3カ所の亀の写真とを並べて観察したところ、細部まで型が一致した。彩色はそれぞれ異なるが四肢、頭、腹の型も全く同じで、1665年に日本から輸出された記録のある295個の内、今までに確認されているBurghleyとKasselのに加えて3個目をスコットランドで発見したことになる。他の蔵品との年代の隔たりからこれがいつ、この館に入ったかに関心があるが今のところ記録は発見されていない。Burghleyのも1688年、1690年の蔵品目録には記載されていない。



スコットランド匿名の館所蔵の色絵亀乗人物置物
L.18cm, H.12.5cm, W.14cm



Burghley House 所蔵の色絵亀乗人物置物と
有田町の土型の写真
L.18.2cm, H.12cm, W.14.1cm



Staatliche Museen Kassel 所蔵の色絵亀乗人物置物
L.19.5cm, H.12cm, W.不明

平成17年度展覧会の報告

常設特別展「肥前陶磁にみる京の影響」

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
 ○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館第1・第2展示室
 ○会 期 平成17年9月30日(金)~11月20日(日)
 47日間(月曜日休館)
 ○出品点数 115件 247点
 ○展示内容

江戸時代に京焼に代表される京都の瀟洒な作風を取り入れた肥前の陶磁器を、館蔵品を中心に一部借用資料を用いて展示紹介しました。

展示構成は、6コーナーに分かれ、各コーナーは、1.京の仁清色絵の影響を受けて生産された有田の色絵磁器である有田・仁清手、2.少量生産だった京焼を大川内の鍋島藩窯(佐賀県伊万里市)の近くで量産した京焼風陶器、3.精選されたきめの細かい素地を使った京焼風陶器の系統である献上唐津、4.磁器のような瀟洒なつくりで、それまでの肥前陶器(唐津焼)にみられなかった型打ち成形技法が用いられている現川焼、5.低火度焼成の色絵陶器で、京の楽焼との関係が推測される軟質施釉陶器、6.天皇家よりの注文品で、京の意匠が強く反映された禁裏御用品です。



色絵ミミズク掛花生 京焼 1670~1700年代(個人蔵)

唐津焼や有田焼に代表される肥前陶磁と京焼は一見、全く異なるやきもののですが、両者は江戸時代の日本陶磁史において、さまざまな形でお互い影響関係をもちながら展開していました。

今回の展覧会では、これまであまり知られていない肥前陶磁の歴史の側面を紹介でき、また、肥前陶磁を通して日本文化の中心である京の雅な世界を楽しんでいただけたのではないかと思います。



学芸員による展示解説の様子



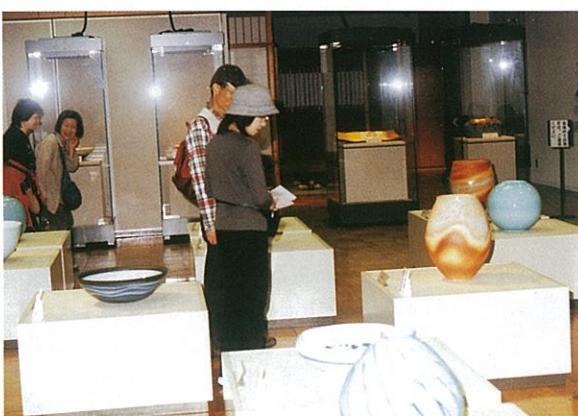
禁裏御用品と「御用御詫物雑形」(伊万里市教育委員会所蔵)

第102回九州山口陶磁展

○会 期 平成17年4月29日(金)~5月8日(日) 11日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各县の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第102回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の太田秀隆氏(福岡県小石原)の「藁灰釉刷毛目掛分鉢」を始め、98点の入賞・入選作品と過去25年の第1位作品を展示しました。審査評は受賞作品に対しては高い評価でしたが、他の作品については作品の形姿・文様・表現などについてかなり厳しい評価がなされ、今後の奮起を期待する内容でした。(審査長:林屋晴三氏)



展示状況 第1展示室

辻 一堂・辻 穀彦 回顧展

○会 期 平成17年8月2日(火)～8月7日(日)

有田焼の窯元「聰窯」の陶芸家で日展作家として活躍された辻一堂氏（1911～83年）・辻穀彦氏（1936～2004年）親子の代表作50点を一堂に展示しました。辻一堂氏は天女や更紗文様、美人画、浮世絵などの作品を得意とされ、辻穀彦氏は白磁に鮮やかな藍色、金彩を用いた斬新なデザインを得意とされており、制作年代によって親子の作風の変遷が辿れるような展示でした。来館者は「聰窯」3代目の辻聰彦氏の展示解説に熱心に聞き入っていました。



展示状況

金ヶ江 省平 作品展

○会 期 平成17年8月9日(火)～8月21日(日)

初期伊万里の再現を目指して作陶に励んでいる金ヶ江省平氏の作品展を開催しました。氏は日本で初めて磁器の焼成に成功した金ヶ江三兵衛（李參平）の子孫で、初代の没後350年にあたる命日（8月11日）に合わせ14代金ヶ江三兵衛を襲名し、有田焼を通じての日韓の友好関係発展を誓いました。

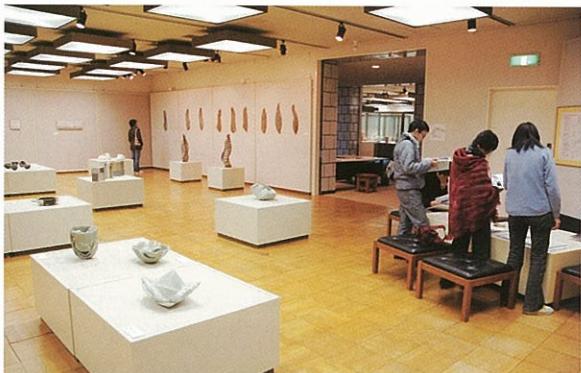


14代金ヶ江三兵衛（省平）氏夫妻

第2回日仏現代陶芸展

○会 期 平成17年11月26日(土)～12月4日(日)

佐賀県在住の陶芸家3名（岡本作礼氏、岩田義實氏、田中右紀氏）とフランス在住の陶芸家2名（ジャン・フランソワ・フィユウ氏、ハギコ氏）による作品展を開催しました。50点の作品が展示され、日本とフランスの新たな陶芸交流の輪が広がりました。



展示状況

新春展「ハレのうつわ—酒器と重箱—」展

○会 期 平成17年12月21日(水)

～平成18年1月15日(日)

当館では、平成14年度より正月開館に関連して、新春に因んだ内容の展覧会を開催しています。今回は、正月にふさわしいハレのうつわとして江戸時代から明治時代に作られた酒器と重箱を展示紹介しました。元日から開館し、佐賀に帰省された親子連れなど多く方が来館され、七福神の描かれた酒器揃いや色絵の鮮やかな重箱など正月にふさわしいやきものを楽しんでいただきました。



染付七福神文酒器揃 有田 南里嘉十作
1850～60年代

シリーズ

やきものの技法(37)

かたうせいけい
型打ち成形

生乾きの素地を型にかぶせて変形させ、輪花皿や八角鉢など非円形の器を作る技法です。高台はロクロで削り出すため円形となります。ロクロによる成形より手間がかかりますが、複雑な変形の器ができ、また成形と同時に陽刻文様を施すことができます。

型打ちによる成形は、有田磁器においては17世紀初頭に始まります。磁器生産の草創期の窯として知られる天神森窯では、1610年代から30年代のものとみられる型打ち成形の染付皿が出土しています。磁器窯においては早い段階から型打ちが行われていますが、磁器窯に先行する陶器窯では型打ち成形のものは見出されていません。

中国景德鎮窯の製品には型打ち成形が早くからあり、中国の技法を模倣して肥前で行い始めたと考えられます。型打ち成形は、変形の皿や鉢、猪口などを製作する技法として江戸時代に多用され、その技法は今日でも伝統的な工房で用いられています。

製作工程は、まずロクロで皿を作り、生乾きの素地を型にかぶせます。次いで高台を叩き締め、布で覆つたあと上から手で押え軽く叩いて型に密着させます。型は上型（つちがた）といい、今日では石膏型が用いられます。江戸時代は素焼きの土型でした。型には陰刻の文様が施されることが多く、出来上がりの製品には陽刻文が現われます。

写真の皿は型打ち成形による八角皿ですが、縁部の4ヶ所に唐花の陽刻文様が見られます。その間の区画には陽刻がなく、染付で花文が描かれ、陽刻文と染付文が交互に配されています。

変形の皿などを作る技法には、型打ち成形の他に糸切細工成形があります。糸切細工はロクロを用いず、板状の粘土を型にかぶせて成形する方法です。高台部は貼り付けて作り、多くは外形に合わせた変形の高台です。削り出しの円形高台である型打ち成形とは、高台の形を見ることで区別されます。（鈴田由紀夫）



染付山水文八角皿（柴田夫妻コレクション）
有田 1630～40年代

シリーズ

やきものにみる文様(37)

ぐんばもんよう
群馬文様

埴輪や出土した骨や馬具などから、馬は古墳時代（4世紀）以降に大陸から、その飼養技術とともに日本に移入され、軍用、輸送用、農耕用として使用されたと考えられています。

古代には馬の飼養にあたる馬飼部とよばれる部民があり、奈良時代から平安時代の律令制下では馬の飼養を担当する役所（左・右馬寮）がおかれて宮廷の馬や官営の牧場（場）の管理、諸国から朝廷に貢進された駿馬や軍馬の飼養を行いました。

武士が台頭する鎌倉時代以降は軍事的な重要性から馬は全国的に飼養されるようになり、東日本が良馬の产地として知られています。江戸時代には各種の厩方役人がおかれて將軍の乗用馬や幕府需要の馬の管理、野馬の飼育、馬具の修理などを担当しました。

日本では馬は古くから神の乗り物として神聖視されており、祈願や神祭の祭に神の降臨を求めて生馬を献上する風習がありました。現在でも社寺に祈願のため奉納する絵馬はこの習俗を起源とするものです。

絵巻や掛幅や屏風などの絵画資料にも馬は多く描かれています。肥前国（佐賀県）出身で、毛利輝元の庇護を受け江戸時代初期に雪舟流を継承し雲谷派の開祖となった雲谷等顔（1547～1618）の「群馬文屏風」（六曲一双）には、水墨画で疾駆する野生の群馬が力強く描かれています。

また、馬は神への献上から縁起の良い動物として皿や壺や水指などの磁器の文様にも用いられています。写真は「色絵群馬文変形皿」で有田の岩谷川内にあった初期の鍋島藩窯の製品と考えられます。糸切り細工と呼ばれる薄い粘土板を型に押しつけて成形する技法でつくられており、口縁部は折縁で黒線と緑絵具で紗綾形文を表し1条の赤線を巡らしています。見込みには染付で群馬図が1枚ずつ異なる構図で描かれており、群馬が集い戯れている様子は雲谷等顔の「群馬文屏風」と類似しています。

（森田孝志）



色絵群馬文変形皿（白雨コレクション）
鍋島藩窯 1650年代頃

※本資料は他の5枚と合わせて平成18年2月16日に佐賀県重要文化財に答申されました。